

蔵

重い扉を開いて暗闇に分け入る
あたかも別次元の世界

黙々と口を動かして葉を食する音
その隣で紡がれる繭玉

私の意識は何処にも向いていない
薄暗い空気の中に浮遊している

死者の気配がする
交感できると信じる

灰色は存在しない
黒と白の混濁液があるばかりだ

溶解して互いを丸め込んだような
プラスチックな色彩はない

私は縮小ということについて考えている
無機的な煩悶の平板さと執拗さについても——

しとしとと降る雨の滴のような、葉擦れのような
交錯し、重ねあわされた音の織物

私は次第に眠りの中に誘われ
吸い込まれ、身軽になってゆく

(2011.8.20)